

出張調査報告書

会派名 参政党

代表者名 山下 勝也 様

下記のとおり出張調査しましたので、報告いたします。

令和8年2月10日

[illegible]

＜主な視察場所及び視察内容＞

- ① 久米島町博物館（館長：宮良みゆき氏）
⇒斎藤用之助公の硫黄島島民に対する功績について
- ② 久米島町役場 久米島町企画財政課（班長：城間忠氏 主事：金城嶺賀氏）
⇒移住者支援、空き家活用等の取り組みについて
- ③ 沖縄県海洋深層水研究所
⇒海洋温度差発電、海洋深層水利用の取り組みについて

① 久米島町博物館

・佐賀県出身の第11代斎藤用之助の久米島での功績について

→明治12年、初代沖縄県令鍋島直彬に随行し、巡査として沖縄へ赴任。

→行政官へ転じ首里区長、那覇区長などを歴任。

→沖縄では、道路や公共施設の整備、学校教育の普及、サトウキビの栽培等産業の推進など、沖縄の近代化に大きく貢献。

→明治38年の硫黄島噴火に際し、700人もの島民の、久米島への避難、移住という大事業を成し遂げた。その際、島民の心に深く寄り添い、島民の信仰の要である先祖代々の遺骨も含めて移住させた。久米島内では島民を受け入れるため、新しく街を開発し、硫黄島島での島民の住居の位置関係まで新しい街の中に再現したという。

→山羊料理は、癖が強いと、沖縄以外の人は敬遠しがちと言われるが、斎藤用之助はこれを、泡盛を飲みながら好んで食べていた。こうした心から地域に溶け込む用之助の姿勢が、沖縄の人々から慕われる要因でもあったという。

→11代の曾孫にあたる14代用之助は、久米島と佐賀市内の中学生の交流事業を立上げ、長年にわたり事業を運営したほか11代目による島民移住の経緯を詳細に報告した図書を出版している。現在でも沖縄、久米島の地域アイデンティティのキーワードとして、斎藤用之助の名は重要な位置を占めている。

→ほかに、久米島産の子牛が佐賀牛の元となっていたり、佐賀大学で研究が行われた海洋温度差発電の実証プラントが久米島にあるなど、久米島と佐賀との縁が深いことを改めて実感した。

→斎藤用之助という人物をキーとして、久米島との交流をもっと市民、県民にも情報発信し、ひいては県外にもユニークな取組として発信し、久米島と佐賀市ともに地域イメージの向上に繋げることができるのではないかと考える。



② 久米島町役場 久米島町企画財政課（移住者支援、空き家活用等について）

＜現状＞

・平成 28 年より、久米島町では移住者希望者支援として地域おこし協力隊の 2 名を「島ぐらしコンシェルジュ」に任命

＜課題＞

・移住希望者に対して、役場の窓口の分散によりたらい回し状態となり、移住を挫折させてしまったり、無計画に移住した後十分なフォローが出来ずに失敗する例があった。

・移住希望に対して、紹介できる空き家などの物件が少ない

・沖縄地方では家屋に先祖の遺骨を保管している場合が多く、空き家として人に貸したり譲り渡す際の障害になることがあるため、公営納骨堂を整備して島民の信仰上のニーズにも応えている。

＜対策＞

・令和元年度に空き家の実態調査を行い、翌年度に空き家バンクを立ち上げた。これまでに 248 件の空き家を確認。国庫補助を利用して、空き家の補修や除却の補助を行っている。コンシェルジュ活動として

1. ホームページやラジオ、WEB マガジンなどによる情報発信

2. メールやオンライン、イベント出店等による移住相談実施

3. ワーキングホリデーなどによる移住体験の開催

4. 仲原家（リノベーションした古民家を活動拠点とし、ワーキングスペースとして利用）の管理・運営がある。

・納骨堂対策として事業費 2 億円（国庫 1 億 6 千万円）で、令和 2 年度までに町営納骨堂の整備を行なった。

＜結果・成果＞

・年間約 30 名が移住

・9 年間の移住実績は 253 名

・転出者は 46 名で定住率は 81.8%

＜移住者の声・現状＞

・久米島は「自然が豊か」「発展しすぎていない、不便すぎない」「のびのびした環境で子育てしたい」

・前住所は、神奈川県が 15 名でトップで東京都が 9 名、単身者が多い。

③ 沖縄県海洋深層水研究所（海洋温度差発電、海洋深層水利活用について）

* 海洋深層水とは、太陽光の届かない 200m 以上の深層水をいう。

* 光合成ができないため植物性プランクトンが生息せず、表層から沈降してくるミネラル栄養素が豊富に含まれている。

* 水温が低い場合ウィルス等がほとんどいない、久米島では約 600m の水深から汲上げているが、海底の取水口と海面との高低差から、サイフォンの原理により動力を使わずに汲上げることが可能。

* 海洋温度差発電は、佐賀大学の池上教授により、国内初の実証実験が行われた。

* 温度の高い海の表層水を使って、アルコールなど沸点の低い媒体を沸騰させ、膨張した気体でタービンを回して発電する。発電した後の気体は温度の低い海洋深層水によって冷却し、再び沸騰、膨張の行程へと循環させる。

* この発電方法に関しては表層水と深層水の温度差が大きく、沖合の近いところに深い海底を有する急勾配の海底地形のある、東南アジア地域に適地が多く存在し、パラオ共和国において民生用の実用発電所の設置が検討されているとのこと。

* 久米島では、現在は発電の実証実験を終えており、プラントは稼働、発電していないとのことだが、海水と発電の媒体は、管を介して熱交換するので成分が混じり合うことはなく、冷却に使った海洋深層水は別の用途に利用することができるため、当初から海洋深層水の再利用が大きなテーマとなっていた。

* 久米島町では「久米島モデル」として町をあげて海洋深層水による地域振興に取り組んでいる。海洋深層水研究所の周辺では複数の事業所が集積しており、産業化、企業の呼び込みの実績を挙げ始めている。

1. 微細藻類の培養と利活用

研究所に隣接して、温室内に水の循環パイプを置いた培養施設が設置されている。藻類はタンパク質やカロチンを豊富に含み、健康食品の材料として利用されている。培養施設に隣接してカフェが営業しており、藻類で作ったクラフトビールやアイスクリームを販売している。

2. 化粧品事業

海洋深層水を使った化粧品の製造施設。自社製品の他、化粧品の委託生産を行なっている。

3. 陸上における牡蠣の養殖（世界初）

海洋深層水はウィルスがほとんど存在しないため、稚貝から養殖すれば食あたりを起こさない牡蠣を生産することができる。現在、

4. 他、車海老、ほか魚介類の養殖 など

*久米島町での海洋深層水事業は久米島町独特の地形にもとづいており参考にしづらい部分はあるが、地域資源として活用していく手法は参考にすべき点もあった。と思った。

